

簡易版 TP (ティーチング・ポートフォリオ)

氏名	本間 健志
所属機関名	獣医学部 獣医学科
職位	助教
在籍年	1 年

教育の責任

専門科目として生命科学実習および獣医形態機能学Ⅰを担当しており、後期より獣医形態機能学Ⅱ、動物形態機能学 C/D、獣医解剖学実習、獣医組織学実習、動物形態機能学実習を担当する。そのほか、国試対策授業として総合獣医学演習Ⅱ関連講義を担当する。

解剖学は、獣医学性が初めて「命を扱う」重みに直面する科目の一つであるため、獣医師となる自覚を促す講義や実習を組み立てる責任を負う。正しい解剖学的知識の伝達に加え、学生の目線に立ち、質問や議論を通じて主体的な学びを促している。

教育の理念

解剖学や組織学は、生理学や公衆衛生、獣医臨床など幅広い獣医学分野を支える「Core(芯)」として獣医学教育の根幹を形成する。基礎学問の定着は、広範な獣医学の学習に不可欠であり、どの分野でも揺るがない軸になると考える。私は暗記ではなく、学生が自ら知識を導き出すプロセスを重視し、また、学生と同じ目線で共に思考することを意識している。例えば、筋肉の同定などでは、教科書の活用法をまず伝え、試行錯誤を通じて学生自身が正解に辿り着くことが大切だと考える。このような指導を通じ、学生の学びの姿勢を築くことを教育理念の中心に据えている。

教育の方法・方針

私の教育方針の第一は、学生が「聞く姿勢」を持てる講義を心がけることである。どれほど丁寧に準備された講義であっても、学生に受け取る意欲がなければ学びは成立しないと考える。例えば、学生が講義中に居眠りをする、あるいはスマホで別のことをしている、などの例が挙げられる。実際、解剖学や組織学は膨大な用語の習得を伴うため、講義中には眠気や苦手意識を抱く学生も現れる。そのような場面を少しでも減らすため、関連する興味深い話題を織り交ぜることで注意を引き、さらに解剖学への関心を喚起する工夫を行っている。

また、講義資料の作成においては「とりかかりやすさ」を重視する。一度に膨大な情報を詰め込むのではなく、内容を分割して工夫したり、1 ページあたりの情報量を抑えたりする。さらに、フォントやレイアウトを工夫し、学生に「難しすぎない」と感じさせることで、心理的負担を軽減することを狙っている。現代の学生は SNS や動画配信サービスを通じて「吸収しやすいコンテンツ」を選ぶ傾向があるため、講義に対しても「この内容なら取り組みそうだな」と思わせる仕掛けが必要であると考えている。

総じて、教育は学生と教員の双方にモチベーションがあって初めて成立すると考えている。私は学生の意欲を引き出すことを教育方針の中核とし、その実現に努めている。

教育の成果

獣医形態機能学Ⅰの講義アンケートでは大多数の学生が授業に満足したと回答したもののほか、約半数の学生が興味、関心が高まったと回答している。また、講義スライドについても学生の「とりかかりやすさ」に貢献できていたことがアンケート結果から窺えた。

加えて、講義後に質問に来る学生も多数おり、講義内容の範疇を超えた解剖学の質問や大学生活に関する質問もあった。このことは、年齢の若い教員という立場であること、そして学生と同じ目線で講義をすることができたからだと考えている。

今後の目標

今後は、学生がより主体的に講義に取り組めるような仕組みを導入したいと考えている。その一案として、各講義で「質問カード」を配布し、学生が自由に講義に関する質問や感想を記入し、終了後に回収する方式を検討している。次回の講義では、それらの質問に回答する時間を設け、時間的に余裕がない場合には質問と回答を印刷した資料を配布する。

この取り組みは、学生に「質問をすれば必ず教員が答えてくれる」という体験を提供し、大学生活全体を通じて重要な学びとなる。また、学生と教員の間で議論の場を増やすことにもつながると期待している。質問を考えることを強制するのではなく、あくまで任意とし、講義内容に限らず解剖学の幅広い疑問でも構わないと考えている。思いつかない場合は空白でもよいが、質問カードの存在そのものは「質問をしてみよう」と思うきっかけとなる。特に、自ら質問をしにくることが難しい学生にとって、気軽に質問や意見、あるいは学生生活で抱えている不安を表明できる環境を提供できると考えている。

根拠資料

2025 授業アンケート結果